

井原第二公園の今後の方向性について

【① 今までの経緯】

1. 育水フォーラムの代表でもあった青木徳生氏の強い思いもあり、昔の朝倉川が流れていたところにホタルを再生するためのビオトープとして井原第二公園を再生することを提案し、井水（くみ上げポンプ式）を利用したビオトープが完成
2. ホタルの飛翔する 5, 6 月に於いては近隣の住民や施設に対しても「生活光」が漏れないように要望。公園内の街頭などもそのような仕組みのものを設置
3. 完成後数年は、ホタルも近隣の方々が認識できるほどに飛び始めたこともあり、地域の方々にも好意的に受け入れられたようにも見受けられたが、井水のポンプ故障のため渇水が起り、生態系が激変したこともありその後、ホタルの幼虫の放流なども行ったものの以前の様な多くのホタルが飛翔するような状況には戻っていない
4. 井水を利用しているために、水温が一定ということもありカワニナの良好な繁殖地としての機能を十分に果たしている可能性が大きい。本川上のカワニナの安定的増加や、近年見られるようになった競輪場前あたりでのホタルの飛翔との因果関係も十分に考えることが出来る。

【② 現状の課題】

1. 夏期の草木の繁茂によって、虫などの危険や夜間の防犯上の不安が近隣住民から多く寄せられている
2. 以前は、ホタルが多く飛んでいたが現在では、「迷惑な草むら化」していることもあり、地域の方々にとって、「親しみのある公園」という存在ではなくなっている可能性が高い
3. ホタルの育成という、目的があまりにもイメージ的に先行し過ぎたために、この公園に関わる人たちが、ある種のがんじがらめの状態になってしまい、この公園に関わっているそれぞれのセクターがチグハグな状況に陥っているために、行政・地域・育水フォーラムそれぞれの関わりを再整理する必要がある。
4. 水路内の河床が葦などの根が張り詰めてしまっている状況のために、ホタルの生育するような生態系としてはふさわしくない状況が放置されている。抜根などの処理によって、河床をホタルが飛んでいた頃の状況に戻す必要がある

【③ 今後の展望（提案）】

1. ホタルの絶対的優先という考え方を、少し修正しながら「地域の子どもたちの親水の間」としてコンセプトを再構築する
 - 水路の周りに、枕木や歩石（歩道、水陸境界等）などを設置し今までより一層水路を使って遊びやすい環境にしていく（地域に愛される場となるよう景観にも配慮できると良い）
 - 「井原第二公園」という名称を「井原ホタル学習公園」とか「井原ホタル親水公園」などに変更していくことによって、地域にとって理解や親しみのある公園にしていく
2. 公園の本川側の通路も含めて、一定の自然環境を保ちながらも、地域の人たちが日常的に利用できる状況にしていくための、強度の間伐、枝打ちを実施していく。
3. 除草などの、年間施業計画を地域、行政、（出来ればフォーラムも）共有していくことで、公園の意義を理解していただくとともに、地域の子どもたちの「素敵な遊び場」にしていく
4. 自治会の公園清掃や除草のスケジュールに入って来るような働きかけも行いながら、地域への理解を求めていく。